

2011 年度 FD 活動評価点検報告書

1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、学長を委員長とした全学 FD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が図 1 のように組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学 FD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会、学部での FD に関する諸活動を 2008 年度より新しく改変した組織である。また、大学教育研究センター（教員 3 人、事務員 4 人で構成）が主管部署として、FD 活動の推進、支援を行っている。

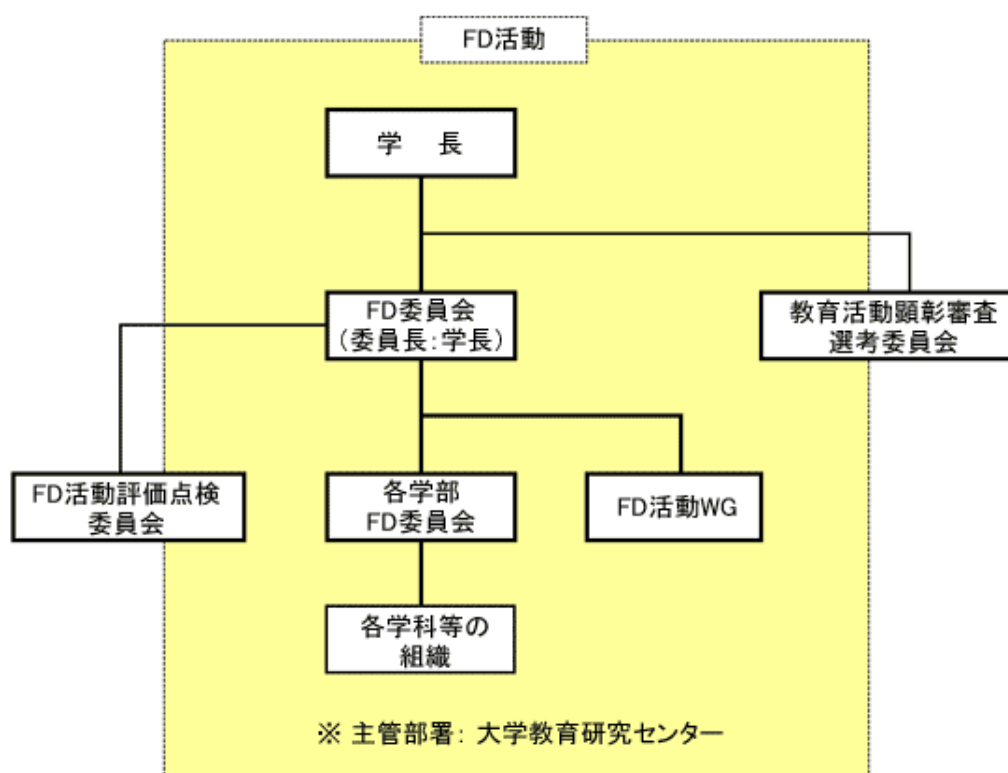


図 1 中部大学の FD 活動組織図

- FD 委員会** : 本学の FD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。
- FD 活動 WG** : FD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。
- FD 活動評価点検委員会** : 本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。
- 教育活動顕彰審査選考委員会** : 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考をする。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者へのみの授業改善の活動は、「教育活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けに HP 上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議・打ち合わせ
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部対象	2) 懇談会
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教室対象	3) 講演・報告会・セミナー
カリキュラム改善	(*1)非常勤を含む	4) ワークショップ
組織の整備・改革	(*1)学生を含む	5) 制度・システムなど(*2)
	授業担当者	

(*1)：対象別 1)～3)で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*2)：授業評価システム、授業改善アンケート等、制度の運用やシステムの構築、および出版などが該当

3. 2011 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』への取り組みを実施しており、この目標を達成するために継続事業を含めて新たな事業に取り組んだ 4 年目に当たる。個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきており、学生の生の声を聞き、学生とともにより良い授業にしていく努力を全学として続けている。こうした中、教育現場である各学部では、以下のような FD 活動の目標設定を行い、FD 活動に積極的に取り組んだ。

- (1) 工学部 : ①2011 年度単独の目標の「教員の授業力アップ」、②2009 年度からの継続目標の「工学部 FD 活動実質化の継続的推進」。
- (2) 経営情報学部 : ①DP (ディプロマポリシー) の確立のために既に掲げてきた「教育目的」を定常的に見直し改善していく習慣を身に着けること、②2010 年度から始まった「キャリア教育」に関し新設された科目の「自己開拓」の教材と授業法の研究、③AP (アドミッションポリシー)、CP (カリキュラムポリシー)、DP の有効な連携を図ること。
- (3) 国際関係学部 : ①学科としての将来の教育構想を議論すること、②教員間で学生に関する情報を常に共有して様々な学生指導の場に役立てること、③非常勤講師を含む教員間で情報交換を進めることで各授業間の連関を高めること、④授業での機器使用などテクニカルな事柄に関し、これが不得手な教員を他の教員がサポートし、すべての授業においてスムーズな運営をはかること。

- (4) 人文学部 : 授業改善取組みの為の具体的な方法。
- (5) 応用生物学部 : 各学科、各研究科、各専攻科における FD 活動の推進と学部としての整合性を図ること。
- (6) 生命健康科学部 : ①学部としての教育顕彰制度に積極的に参加すること、②臨地実習における指導力の向上および授業科目としての臨地実習の質の向上、③臨地実習施設の指導者および教員の資質の向上を目的としたセミナーの開催、④量的研究における統計解析能力の向上、⑤大学 FD 活動の方針に沿った取組み。
- (7) 現代教育学部 : 「魅力ある授業づくり」を進めるための資料収集と情報の共有、課題の検討などを実施すること。
- (8) 全学共通教育部 : 教育科目（区分）のコンセプトと改革の趣旨への共通認識・理解を深め、授業内容の改善・充実と運営の円滑化を目指す。
- (9) 国際人間学研究科 : 講演会とシンポジウムの開催を中心に、構成員である教員の研修並びに院生・学生の教育においての実践的な成果を得ること。

4 年目となった『魅力ある授業づくり』は、各学部でも意識した目標設定がなされるようになり、3 年目で多かった各学部・各学科での具体的活動に対する現状の振り返りや教員意識の向上から、具体的な取組みを特徴とした目標が変わってきており、目標設定の点からも『魅力ある授業づくり』の浸透と展開を伺うことができる。

4. 2011 年度の FD 活動の取組み

4.1 全学の取組み

2011 年度の全学としての取組みは、大学教育研究センターHP (<http://www.chubu.ac.jp/fd/>) に詳細が記されている。主な取組みは、①教員による教育活動重点目標の設定、②授業改善の取組み、③FD フォーラム・講演会、④FD に関する研修会・説明会等、⑤出版物、⑥教育活動顕彰制度の実施に分けられ、主な点についての現状と評価を記述する。

① 教員による教育活動重点目標の設定

教員個人の FD 活動を自己点検することを主な目的として全学の助教以上に提出を求めている教育活動重点目標・自己評価シートは、年度初めに、各教員が教育活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2011 年度の目標設定者は在籍教員の該当者 469 人中 459 人、自己評価提出者は目標設定者 459 人中 453 人であった。

その形式・内容は、2005 年度以前は全学統一であったものを学部、学科増により各学部の特色を生かすべく学部ごとに定めるように変更したが、今後は大学の重点目標に沿った全学共通項目を設けることを検討していくこととなっている。

② 授業改善の取組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取組みとして、以下の 6 つを取り組んできた。

1) Web による「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

「Web 入力方式」だけであった「学生による授業評価」に「携帯電話入力方式」を導入して 2 年目となる。2011 年度、「授業評価」の学生の回答率は、春学期約 21%、秋学期約 17%、教員の自己評価回答率は、春学期約 49%、秋学期約 48%であった。

秋学期回答率は、例年と同様、春学期に比べて減少しているが、Web 入力方式に移行した 2008 年以降、秋学期の学生回答率では最も高い結果であった。

学生による自由記述件数は春・秋学期合わせて 4,542 件であり、2010 年度より 800 件ほど減少した。この件については、学生による授業評価の設問 8 である「この授業は総合的に魅力的な授業でしたか」という平均ポイントが、2008 年以降最も高い 3.98 ポイントとなっており、授業の改善による効果とも考えられるが、自由記述の好評・不評についての分析を行っていくことも必要である。

毎年度、僅かずつ学生の授業評価回答率の増加傾向にあるが、さらなる学生の回答率増加に向けた教員の働きかけや教員の自己回答率、コメント率がさらにアップすることが望ましい。

2) 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供（授業改善アンケートシステム）

「授業改善アンケート」は、クリッカーとしての利用を含めて通年で 167 件の利用である。「授業改善アンケート」を援用して、授業中に教員が学生の反応を携帯電話を活用して瞬時に把握できるクリッカーシステムである「Cumoc（キューモ：Chubu University Mobile Clicker）」も 2 年目となる。スマートフォン対応を取っていなかった（フルブラウザには対応していた）同システムでは、学生のスマートフォン利用者が急速に増え、今後もスマートフォン利用者の増加が予測されたことから、2011 年度中にシステム改修による対策を急遽行い、2012 年度からスマートフォンからの利用がより円滑になるような環境を整えた。学生の生の声を取り入れやすくなっており、さらにスマートフォン対応により、利用の増加が期待される。

3) 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業担当者からの希望による授業ビデオ撮影支援制度の 2011 年度実績は 17 件で、授業サロンにおける授業担当者の振り返りのための撮影を 10 件含んでいる。

4) 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ることで、他の教員が授業を参観できるシステムであるが、2011 年度に実施報告があったのは特になかった。ただし、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

5) 全学公開授業

「全学公開授業」を 3 件実施し、各回 9～15 人の教職員の参加があった。また、内 1 回は、Cumoc を活用した授業の公開が行われた。

6) 授業サロン

「授業サロン」では、学部間を越えた 5 人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行っている。学部間を越えた 5 人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行う「授業サロン」が春学期 1 グループ、秋学期 1 グループを実施し、授業の振り返り、また授業改善のヒントになる点などが意見交換された。参加人数は少ないが着実に FD ネットワークの構築に繋がり、本学の FD の大きな原動力になることが期待できる。

③ FD フォーラム・講演会

大学外から（ジャーナリストから）みた若者たちと大学教育への期待について取り上げた FD 講演会を 7 月（参加者 97 人）に開催した。また、9 月に学生主体の『魅力ある授業づくり』について、基調講演とパネルディスカッションを含む FD フォーラム（参加者 71 人）を開催した。

さらに、講演会・フォーラムとは一線を画した試みとして、10月に「大学コンソーシアム石川 第5回FD・SD研修会」の様態をリアルタイムで映像配信によるライブ講演会（参加者20人）を実施した。

④ FDに関連する研修会・説明会等

毎年、新任教員説明会では、学長、事務局長、大学教育研究センター長から、本学の建学の精神、大学理念、本学のFD活動等が説明されている。ここでは、大学の説明に重点を置いているが、これとは別に「話し方・板書の仕方」など授業スキルのキャリアアッププログラムを実施している。2011年度からは、元アナウンサーを客員教授として迎え、「話し方」に関するプログラムを4回開催するとともに、先述の「授業サロン」にもおいても授業中の話し方についてアドバイスを受けるといった授業スキルについての実践的研修が進められた。非常勤講師については、全学レベル、学部・学科レベルの懇談会・分科会を実施しているが、実践的研修であるキャリアアッププログラムに非常勤講師の参加が多いのも特徴といえる。こうした実践的研修には、特に教歴の少ない教員にこれらのプログラムに積極的に参加を促す環境が必要である。

⑤ 出版物

「教育・研究活動に関する実態資料」及び「中部大学教育研究」を発刊しており、前者は様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として活用されている。また後者は1979年より発刊されてきた「教育資料」を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供し、教育改善・質的向上に役立てることを目的に2001年から発刊されており、教員の情報共有の場ともなっており、また研究論稿は教育研究の分野で引用されている実績を有している。さらに、大学の情報公表における資料作成にも利用されている。

⑥ 教育活動顕彰制度

2008年度より学部での評価の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰しており、2010年度の「教育活動優秀賞」は14人、「教育活動特別賞」では初めて非常勤講師1人が受賞する結果となった。実施要項、審査総評等はHPで公開している。

4.2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科においてFD活動評価点検報告書が作成されており、ここには提出された報告書から2011年度の学部・研究科・学科でのFD活動の特記すべき事項を①授業・教授法の改善に関する取り組み、②研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み、③その他の取り組み、の3つの目的別にまとめた。

①授業・教授法の改善に関する取り組み

(1)学部でのFD講演会の開催（工学部/工学研究科・人文学部）

(2)学部での研修・セミナーの開催（経営情報学部/経営情報学研究科・国際関係学部・生命健康科学部・全学共通教育部）

(3)学部・学科での公開授業（応用生物学部/応用生物学研究科・現代教育学部・全学共通教育部）

(4)授業反省会（生命健康科学部）

②研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み

(1)学外・学会・研究会・協議会での交流（生命健康科学部・全学共通教育部）

(2)教員スタッフの情報発信力の向上を目的にした講演会・シンポジウム（国際人間学研究科）

③その他の取り組み

(1)新任教員の研修（現代教育学部）

(2)授業実施状況と課題調査（全学共通教育部）

教員の世代交代が多い学部等では、新任研修に学部独自で取り組んでいるといった、各学部・研究科の現状課題に関する FD 活動の取り組みが行われている。学部・学科独自での公開授業が行われるようになったのも一つの特徴と考えられる。教員スタッフの情報発信力の向上を目指したシンポジウムの取組みも、準備・実施・報告を通して一連の構成員の能力開発に繋がっている。

また、各学部からの FD 活動に関する課題については、1) 講演会・セミナーに参加する教員の固定化、2) 課題の効率的な共有化の推進方法、3) 学部・学科だけで対応できない学生のメンタルな問題についての全学的な取組み、4) 学生の入学から就職までの人材育成への取組み、5) 世代交代の時期を迎えての新任教員の割合が増大することへの対応、6) 教職課程を含めた FD 活動の準備、7) 教育研究活動の向上に関する検証、などが挙げられた。

4.3 2011 年度の FD 活動の取組みの傾向

2011 年度の本学の FD 活動の目的別、対象別（参加対象別）、内容形式別にまとめたのが次の4つのグラフである。図 2.1～2.4 から、本学の FD 活動は、図 2.1 の目的別で見ると授業・教授法の改善が約半数を占めており、教員個人の教育力に力が入れていることがわかる。また、図 2.2 の対象別の結果より、2010 年度から比較すると学部別より学科別対象が増加し、より教育現場に近いところまで浸透していると考えられる。図 2.3 および図 2.4 から学生参加型の FD 活動の取り組みやワークショップ形式がやや少ない傾向にある。さらなる学生参加型の FD 活動の企画やワークショップは、講師確保について積極的に取り組む必要があると考えられる。

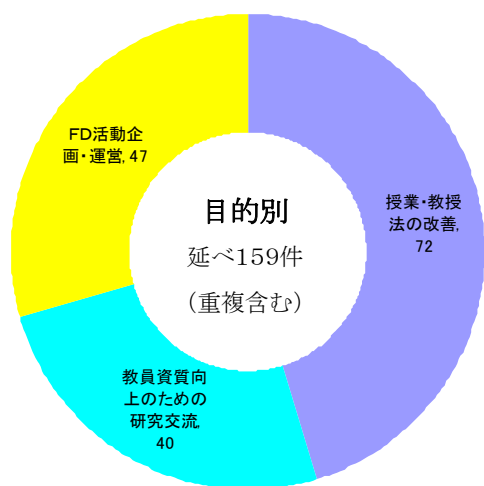


図 2.1 目的別にみた FD 活動

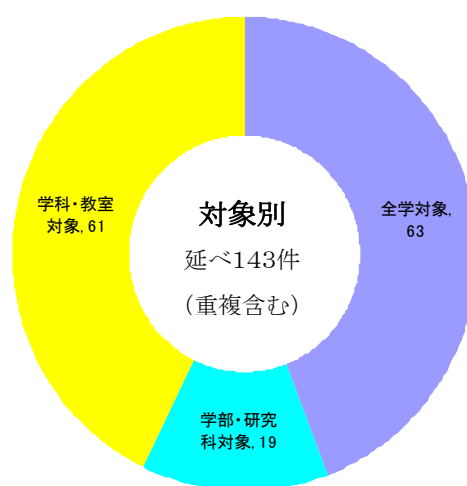


図 2.2 対象別にみた FD 活動

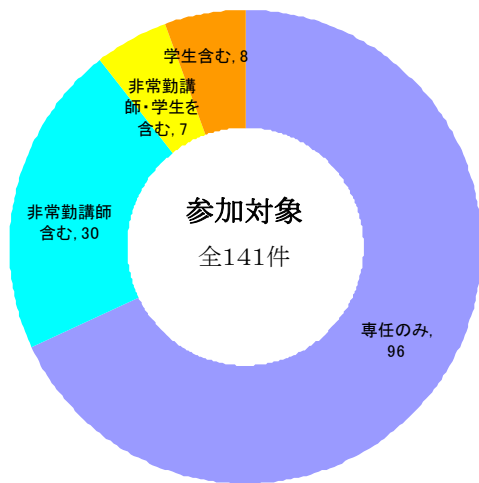


図 2.3 FD 活動の参加対象

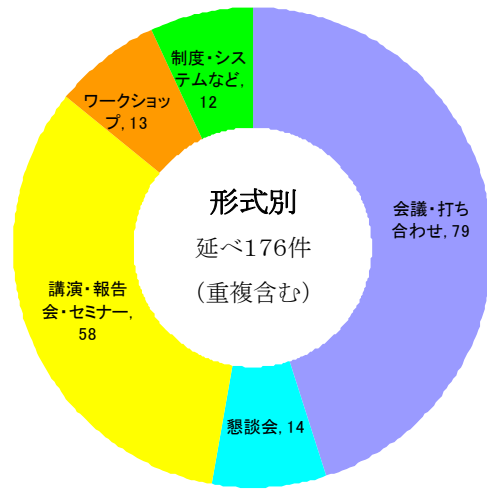


図 2.4 形式別にみた FD 活動

(※図 2.1、図 2.2、図 2.4 の合計件数は、重複項目があるため一致しない。)

5. FD 活動に関する課題と今後の計画

各学部での取り組みにもあったように、授業見学による授業改善に向けた取り組みを広げていくことは、徐々に浸透しつつある。また、新任教員の研修については、全学の説明会だけでなく、各学部での様々な取り組みからもその必要性が浮き彫りになった。大学全体としても授業見学（授業オープン化制度、公開授業・授業サロン）のさらなる推進と、主に新任教員を対象とした研修プログラムなどを整えていく必要があると考えられる。

また、授業評価の回答率の改善（学生による授業評価回答率、教員による授業自己評価回答率、教員によるコメント率）については、学生がスマートフォンでも参加できるようにシステムの改善を図ったが、回答率を上げることに囚われずに、授業評価から得られた結果を基にさらなる授業改善に繋がっていくように全学を挙げて教員の意識を高めるよう推進していく必要がある。

最後に、2011 年度で FD 重点目標として『魅力ある授業づくり』を掲げて取り組んだ 4 年が経過し、今後の重点目標をどのようにするか、これまでの 4 年間の評価点検を行い、本学 FD 活動が新たなステップに進めるように検討することが大きな課題であり、各学部から挙げられた課題についても、具体的な対策を検討していくことが重要である。